

列車にドライブレコーダー

ご存知の方も多いですが、JR九州は、設備の点検に役立つとして一部の編成（883系）にドライブレコーダーを設置し、今後導入を進めるとしています。事故の状況などを記録するドライブレコーダーについて、国内では、鉄道車両への設置は義務付けられていませんが、16年前のJR福知山線の脱線事故のあとの国の検討会では、設置が望まれるとされました。これに関して、NHKが大手鉄道会社の設置状況を調べたところ、設置を進める会社がある一方で、一部の会社では設置しておらず、まだ十分に広がっていないことが分かりました。JR他社における設置の理由について、JR東日本は「事故などの際に警察の現場検証が短くなり安全運転につながることや再発防止に役立つから」としています。また、設置しない理由について、JR四国は「整備およびランニングコストなどに多額の費用を要するため、設置は見送っている」としています。この「設置しない理由」はさまざま、大手私鉄各社において、西武鉄道は「ドライブレコーダーは、搭載により安全性が上昇するというものではないため、安全設備としての優先度は低くなっている。投資効果を整理したうえで設置を検討していきたい」としており、小田急電鉄は「事象発生を未然に防ぐことに注力し、ホームドアの設置などに取り組んでいる」としています。



東京の渋谷駅と吉祥寺駅を結ぶ「京王井の頭線」の運転台に設置されているドライブレコーダーの映像とJR各社、大手私鉄各社のドライブレコーダー設置状況（5/5 NHKウェブニュースから抜粋）



当然ですが、乗務員職場では、このドライブレコーダー設置に対して疑問視する声が数多く上がっています。安全のために取りつけるという主旨のもと、列車の前面、側面の撮影はやむを得ないとしても、なぜ、乗務員室内の録画を行う必要があるのかと。乗客からの監視、管理者からの監視に加えて、機械による四六時中の監視緊張の連続です。1秒足りとて気が抜けません。また、後日、映像をもとに個別の指導が行われかねません。このように、乗務員の間では、もはや「安全のために」という主旨を超えて、「監視カメラ」という認識の方が強くなってしまっているのが現状です。こうした、労使間の認識の違いによる溝を埋めていくためには、やはり「乗務員目線」で声を上げていくしかありません。無関心であること、何も言わないことは、会社による労働条件の切り下げ、労働強化への加担を意味します。